

ものみりよくプロジェクトの10年の検証 ～中山間地域における生活課題の現状調査をふまえて～

Verification of The Monomiryoku Project for 10 Years

堀川涼子

Ryoko HORIKAWA

1. 研究の背景と目的

我が国は少子高齢化の進行がますます顕著になり、人口減少社会と言われて久しい。特に、中山間地域では、2014年に日本創生会議が「消滅可能性都市」を発表し、少子化や人口移動に歯止めがかからず、将来に消滅する可能性がある自治体として全国896市町村を具体的に明示し、大きな反響をよんだ。¹⁾

中山間地域では都市と比べ、地域の絆は強く相互扶助が残っていると言われるが、地域の支え合い機能は低下し、集落機能の維持、存続が危ぶまれる地域も少なくない。人口減少と高齢化により、地域の力だけで買い物や通院等生活課題を解決していくことが難しい状況になっている。中山間地域の暮らしを支えていくために、これまでの在り方を超えた新たな「地域福祉の視点を取り入れた方法」が求められているとし、2012年から「ものみりよくプロジェクト」を開始した。

そこで本研究では、ものみりよくプロジェクトが開始して2022年で10年という節目に、改めて生活課題調査を行い、これまでの活動の振り返りと今後のプロジェクトの方向性を考えることを目的としている。

2. 津山市加茂町物見地区及びものみりよくプロジェクト

本研究の対象地区である岡山県津山市加茂町物見地区は、鳥取県との県境にある中山間地域で、人口89人・43戸・高齢化率51.7%（2023年1月1日現在、津山市統計書より）の過疎・高齢地域である。15歳未満の年少人口は6人（6.7%）と少なく、15歳～64歳が37人（41.6%）、65歳以上が46人（51.7%）である。

「ものみりよくプロジェクト」は、少子高齢化が急速に進む物見地区で「どうすれば生活課題を解決し、住民が住み慣れた地域で安心して生き生きと暮らしていけるのか、そのための地域づくりを、地域住民と関係専門機関・団体・専門職（津山市行政・津山市地域包括支援センター・津山市社会福祉協議会）、そして大学（美作大学）の三者が協働し地域課題・生活問題を解決するためのプラットフォームである。

3. ものみりよくプロジェクトのこれまでの活動

このプロジェクトは2011年4月に行った戸別訪問による生活ニーズ調査から明らかになった課題解決のために発足した。その後、2014年、2016年に活動を振り返るアンケート調査を実施し、2017年から2018年にかけては「物見地区地域福祉計画」策定のために6回のアンケート調査と12回のワークショップを開催し、住民の声を定期的に拾い上げていった。そして2019年度から23年度までの5か年計画「輝くみらい！ものみりよく計画」を住民主体で策定した。ここでは5年後も「物見で暮らし続けたい」「物見に住んで良かった」と思えるための取り組みを計画に書き入れた。

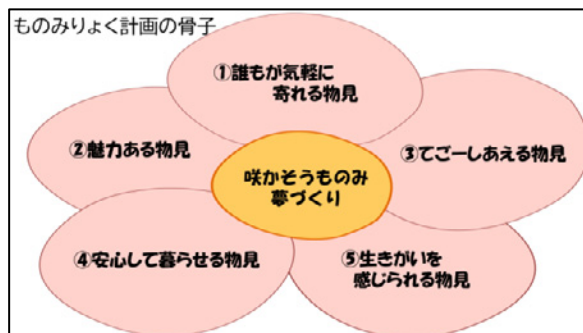


図1 「輝けみらい！ものみりよく計画」の骨子

10年間の活動では、ニーズ調査のみならず、互いに助け合う仕組みとして「世帯票」の作成、支えあいマップ作り、毎日の見守りための「緑旗」の設置、年に一度の防災訓練を行ってきた。また顔の見える関係づくりのため、交流会の実施や、昔写真展の開催、閉じこもりがちな冬季のこけないからだ体操（介護予防体操）の開催支援やクリスマス会の開催、訪問サンタ等の活動も行ってきた。さらに先進地への視察を3回、伝統行事「花まつり」の開催支援等について10年間で54人の学生が関わり、様々取り組みを続けてきた。これら学生たちは、授業や単位とは無関係に、自主的に社会福祉学科独自の「自主ゼミ」に集まり、地域を第2のキャンパスとしてほぼ3年間継続的に物見地区に関わってきた学生たちである。



写真1 これまでの活動の様子

残念ながら、5か年計画のうち、2020年から2022年の3年間は新型コロナウイルス感染症の流行により、ほとんどの行事が行われず、「人が集まる」「交流人口を増やす」ことが難しく、計画が進んだとは言えない状況がある。

4. 2022年度に行ったアンケート調査概要

2018年に策定した「輝くみらい！ものみりよく計画」の最終年度が2023年度という中で、これまでの活動の振り返りと計画見直しのため、2022年度自主ゼミメンバーの6人の学生が、住民との交流を深めながら、再度、中山間地域である物見地区の生活課題についてアンケート調査を行った。10年前との比較や、現在の課題、今後想定される課題を明らかにし、「ものみりよくプロジェクト」の10年とこれからを考えることを目的とした。

調査対象：15歳以上の物見地区住民
調査期間：2022年5月15日から6月19日

調査方法：集合自記式（一部留置）
回収率：97.5%（47世帯 97人）
調査項目：基本情報
日常生活での困りごと
外出について
雪について
災害・緊急時について
近所付き合いについて
物見の地域特性について
情報の収集と発信について
ものみりよくプロジェクトの認知度
ものみりよくプロジェクトの関心 等

アンケート調査結果は、ものみりよくプロジェクト会議で役員に発表し、そこでの意見も加えて、住民に発表して、今後のプロジェクトの方向性を話し合う材料とした。



図2 2011年調査時の年齢構成

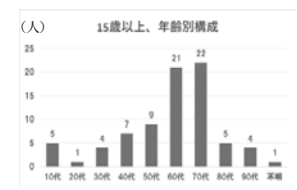


図3 2023年調査時の年齢構成

グラフを見てわかるように、10年で人口は三分の二になり、高齢化率は5%上昇している。しかしまだまだ元気な60歳代、70歳代が多い今、ものみりよく計画について考え、これからの物見について行動する最後のタイミングともいえる。

5. アンケート結果

アンケートの生活課題において、①移動手段、②広報活動、③防災活動、④雪の影響 の4つに着目した。

①移動手段では、自家用車移動が多いため、免許返納後に不安を感じている人が多かった。②広報活動については、プロジェクトの活動を知っている人が88%いたものの、「聞いたことがある」「知らない」と答えた人が7%あり、「全員で取り組む」プロジェクトになっていないことが分かった。また「聞いたことはあるが参加していない」「知っているが参加したことはない」人も一定数おり、活動の参加者が偏っていることが課題として挙げられた。③防災活動は、プロジェクトの活動の中でも最も参加率が高かった。防災意識が高いことは物見の強みである。ただ、実際に災害が起これば「陸の孤島」になる可能性が大きい中で、どちらかというと、自助努力を想定した備えをしている人が多く、

お互いに助け合う意識が高いとは言えなかった。④雪の生活への影響については、2023年1月の豪雪の記憶が新しく、特に高齢者は家から出られずに孤立した人が多かったことが分かった。閉じこもりは心身の機能低下につながり、フレイルを引き起こすリスクが高い。

これらの結果から、①移動支援を行っているNPO団体への利用会員、協力会員への加入や、互いに声をかけあって買い物に行く「てごーしあえる物見」の取り組み、②世代や性別を問わず、プロジェクト活動に参加者を増やす、「誰もが気軽によれる物見」「魅力ある物見」への取り組み、③世帯票や見守りの緑旗と緊急時の避難行動を組み合わせた「安心して暮らせる物見」、④冬季にも互いに安否確認をしたり、出かけられる環境を作ったりして「安心して暮らせる物見」「生きがいを感じられる物見」への取り組みが必要であることをまとめた。それを物見地区の住民に対して投げかけ、再度、ものみりよく計画の骨子を再確認することができた。

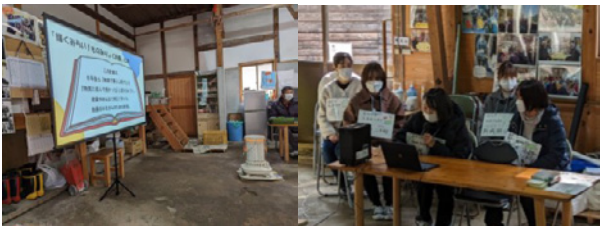


写真2 学生が住民に対して発表している様子



写真3 学生の発表を踏まえて住民座談会を行っている様子

また4つの課題に対して、②広報活動や③防災活動のように、物見内で取り組めることと、①移動手段や④雪への影響のように物見外と協力が必要な項目を分け、物見内で取り組めることについては、いっそうのお互い様の助け合いをプロジェクトで進めていくこと、物見外と協力が必要なことは、NPO団体への利用会員・協力会員への登録など、物見地区を取りまく上加茂地区全体で協力していくことが

必要であることを確認した。

6. 考察

この取り組みは当初より、①地域課題・ニーズ・特長の明確化と可視化、②地域の持つ特徴を生かす、③外部の目（学生の視点・力）の活用、④プロセス重視を基本とした「住民活動主体の原則」の取り組み、⑤「場」の用意による住民の主体的参加の保障という5つの柱を立てて行ってきた。²⁾

10年間の取り組みにおいて、交流会や料理教室の開催など定期的に交流する場ができ、女性や若者の声が反映されるようになってきた。また世帯票や緑旗の設置など互いを気かけ、見守る仕組みもできた。防災訓練も必ず行うものとして定着した。ただ、残念ながら、地域福祉計画である「輝くみらい！ものみりよく計画」の実行時と新型コロナウイルス感染症流行期が重なってしまったこともあり、計画前から取り組んだことは継続されたが、新たに計画に上がったものの実行できなかったことが多くある。また、活動が自粛され、関わられなかった時期も多く、学生が入り替わることで継続的な関係性を気づきにくかった。地域内でも寄り合うことが減り、ものみりよくプロジェクト自体の意義が薄れているように感じている。

今回の調査では、高齢化が進む中、物見地区内で行えること、物見を含めた上加茂地区という広域で取り組むことの整理ができ、これからは上加茂地区という広域で課題解決を考えていくことが必要であるという結論に至った。

10年間のものみりよくプロジェクトの活動は今年度で一つの区切りを迎えた。物見地区の新たなスタートを応援したい。

<引用・参考文献>

- 1) 増田寛也 (2014) 交通国土政策研究所「政策課題勉強会」「地域消滅時代」を見据えた今後の国土交通戦略のあり方について https://www.mlit.go.jp/pri/kouenkai/syousai/pdf/b-141105_2.pdf
- 2) 堀川涼子 小坂田稔 (2013) 「高齢化が進む中山間地域におけるまちづくり第2報—「ものみりよくプロジェクト」設立のプロセスと展開—」『美作大学・美作大学短期大学部紀要 Vol. 58』
- 3) 堀川涼子 小坂田稔 (2012) 「高齢化が進む中山間地域におけるまちづくり第1報—地域と大学が協働で行ったニーズ調査の結果について—」『美作大学・美作大学短期大学部紀要 Vol. 57』